

# 来歴否認の意味論的解明

—フレーゲの固有名と指標詞の意義理論を手懸に

## Semantic Explication of the Denial of one's own Personal History

—In terms of Frege's theory of sense of proper name and indexicals

文学研究科人文学専攻博士前期課程修了

市 川 三 紀

Miki Ichikawa

### 序論

「固有名」に関するパズルの回避が数学者・論理学者G. フレーゲ (1848-1925) やラッセル等に代表される記述論者たちによって提案され、他方その提案はまたクリプキやカプラン等の直接指示の理論家たちの批判に曝されてきた。これらの問題は固有名の意味論上の身分を問うものである。だがフレーゲが導入した固有名の「意義Sinn」と「意味Bedeutung」の区別の有効性はなお検討するに値するのではないか。

そこで本稿では、「固有名proper name」を中心に、フレーゲの意義論を見直そうと試みる。

他方で、固有名解釈や命名作用等を考察し、固有名とは何かを、現代精神分析理論におけるラカンの結び目理論から見てゆく。それを橋渡しとして同一の対象を指示する異なる固有名ならびに指標詞「私」に各人が異なった意義 (Sinn) を結びつけることがあるというフレーゲの意義論の見地が、「信念文のパズル」や、「宵の明星=宵の明星」と「明けの明星=宵の明星」の「認識価値」の差異、さらには「来歴否認」や「二重人格」といった現象の分析に有効な意味論的手立てを与えうるかどうかを問いたい。

### I 固有名と同一性

固有名論争は、20世紀におけるフレーゲ・ラッセルらの、名前・記述などを含む単称名辞に関する言語哲学的な見解に対する批判、さらには個体の把握の形而上学的・認識論な批判に関わる。

フレーゲの対象指示によれば、必ず命題の構成要素となる何かしらの概念即ち「意義Sinn」や個体概念individual conceptを介して、対象即ち「意味Bedeutung」が指示される。記述説では対象指示は、固有名や表示句あるいは記述が表示する表示概念denoting concept (フレーゲでは意義Sinn) を介して表示対象denotationが表示される<sup>1</sup>。

## 1. フレーゲにおける表現の階層分け

フレーゲは記号の「意義Sinn」と「意味Bedeutung」とを言語外的な客観的存在であるとみる実在論的傾向をもつ。また語の意味を文脈で問う「文脈原理」や語に対しての「文の優位」を主張するのは文脈主義的見地からである。以下では固有名が記述や文と同化される過程を追う。

彼が最初に「対象Gegenstand」と「概念Begriff」の区別を行ったのは『算術の基礎』[GLA]においてであった。さらにそれらについてなされる言表を区別するため、記述を含む「固有名Eigename」と「概念語Begriffswort」との区別をする。また概念間においても「階型Ordnung, Stufe」を導入しており、「(対象)は、いわば0階の存在者と考えられる。第一階の(概念)とは、「その概念の下に帰属する諸事物〔対象〕の特性である。」(GLA §53, 64)

そして言語表現を「名前Name」と「文Satz」とに区別し、さらに名前を補完が必要で不飽和な「函数名Funktionsname」と対象自体と同様に飽和しているものとみなす「固有名Eigename」に区別した。「函数名は、その補完の必要性を刻印づけるような空所を伴っており、フレーゲはそれを「独立変数の場所Argumentstelle」(GGA I, §2,6)と呼び、ギリシャ字母で表示し、「独立変数記号」と称する。」<sup>2</sup>「独立変数の場所 $\xi$ 」とは、固有名が代入される場所のことである。また独立変数と函数とを合わせて、一つの複合的な全体が形成されると彼は考えた。そうして独立変数の場所には固有名主語、函数の場所には述語が代入される。また文の値は、真偽を意味する真理値である。

以上の三者関係(独立変数・函数・函数値)は、主張文にも拡張される。そこから、例えば「日本の首都」というような形で表される複合的固有名(確定記述)へ、主張文の文基<sup>3</sup>の同化が試みられる。フレーゲに従えば、固有名が一意的にその対象を指示するならば、複合的固有名「日本の首都」は、まず固有名「日本」と「 $\xi$ の首都」という不飽和な函数的表現を伴う句とに分けられる。不飽和な函数的表現における独立変数の場所に固有名「日本」を補完し、結果「日本の首都」という複合的固有名の函数値として、「日本の首都」という表現が東京という唯一の対象を指定していると考えられる。複合的固有名が一意的な対象を指示している時、文の真理値は真となる。このようにして独自の意味論が形成されてゆく。

## 2. "Über Sinn und Bedeutung" における同一性

数学の論理的な基礎付けのために、独自の論理を作らねばならなかったフレーゲの考察は、函数論的な視点を統辞論(構文論)、さらには意味論にまで拡張された。また彼は「文の真理値をその文の意味」(SB.34)とみなす認識的に価値が異なる場合の「同一性言明」において、ライプニッツの「真理保存的置換原理Salva-Veritate-Prinzip)」により、その真理性の検証を行う。では「同一性Gleichheit」と固有名との関係はどのように解釈されているのだろうか。

「同一性 (Gleichheit) は、そもそも関係であるのか。そして、関係であるならば、それは対象の間の関係であるのか、それとも、その対象に与えられた名前との間の関係であるのか。後者の見解は、私の概念記法において採用した見解であり、この見解を支持すると思われる理由は、次のようなものである。それは、 $a = a$  と  $a = b$  が、明らかに異なる認識価値 (Erkenntniswert) を有するという理由である。すなわち、 $a = a$  がアプリアリに妥当し、カントに従えば分析的 (analytisch) と名付けることができるのに対して、 $a = b$  の形式を持つ命題は、非常に価値あるかたちで我々の認識を拡大することを含むことが多く、必ずしもアプリアリに根拠づけられるとはかぎらないという理由である。」(SB.26)

フレーゲは、もし異なる名前同士の同一性関係が成り立つとすれば、それは名前や記号が何かを表示する場合においてのみであるとする。

「同一性とは、二つの名前すなわち 'a' と 'b' とがそれぞれ意味するもの間に成立する関係であると考えられるならば、 $a = b$  が真であるとき、 $a = b$  を  $a = a$  から区別することは不可能であるように思われる。なぜならばその場合には、ものの自己自身に対する関係、すなわち、すべてのものが自己自身に対しては持つがいかなるものも自己以外に対しては持たない関係が、この等式によって表現されていることになるからである。従って、 $a = b$  という等式を使用して我々が述べようとしていることは、'a' と 'b' という二つの名前または記号が同一のものを意味しているということにほかならないように思われる。そして、まさにこの二つの記号そのものが話題となっていることになり、この二つの記号の間の関係がその等式によって主張されていることになるであろう。しかし、この関係が、名前または記号の間に成立するのは、その名前または記号が何かを名指し (benennen)、表示している (bezeichnen) 限りにおいてのみである。」(SB.26) つまり異なる名前や記号の間に成り立つ同一性関係とは、それが成立する条件として、名前や記号が名指している、また表示している同一のものが在る限りにおいてということになる。また表示された同一のものに関して、名前や記号を結びつけているという関係性において同一性関係が成立する。

彼はこの結びつけという行為が「恣意的 willkürlich」なものであると述べている。

上記の等式のような表記や形式的な文を用いて、われわれはもはや表記法となってしまった記号のどこに差異を見出すのか。フレーゲは「かくして、なんらかの差異が可能であるのは、表示されたものの与えられる様態 (die Art des Gegebenseins des Bezeichneten) の区別に記号の区別が対応するということによるのみ」(SB.26) に求めるのである。従って「記号(名前、結合 (Wörterverbindung)、文字) に結びつくものとして、その記号により表示されたもの、すなわち、記号の意味 (Bedeutung) と呼ぶことができるものに加えて、記号の意義 (Sinn) と私が名付けたいものを考慮すべきである。そして、表示されたものの与えられる様態は、その記号の意義の中に含まれることになる。同様に、

「宵の明星」と「明けの明星」の意味は同一であるが、それらの表現の意義は同一ではないということになるであろう。」(SB.26-27) つまり同一性言明における認識的価値の相違は、意義の差異へと還元される。そして彼は記号や名前と解しているものを、「固有名 *Eigenname*」のような役割を果たすものであると考え、その意味は「対象 *Gegenstand*」であるとした。そして「そのような機能を果たす表記を一括して固有名と名付けることが許されるであろう」(SB.27) という構想を導く。ここでの固有名は、「何らかの対象の規定の仕方をもつもの」「機能を果たすもの」「認識する者がそれに異なる、または同一の意義を結びつけるもの」と解される。

またフレーゲは、「もし文の意味が真理値であるというわれわれの推論が正しいならば、一つの文の真理値は、別の意義をもちつつも同じ意味をもつ表現で、その文の一部を置き換えたときも不変でなければならないはずである。」(SB.35) と考え、ライプニッツの「真理保存的置換原理」、つまり「真理を損なうことなく互いに代入することができるものは同一である」(SB.36) という原理を用いての検証により、「文の真理値は、文中の一つの表現をほかの同じ意味のもので置換しても、影響を受けない」(SB.36) ということを導き、固有名の表示するものが意味であるとするならば、文の意味は真理値として求められると考えた。

## II 固有名の意味論

### 1. フレーゲの固有名論

フレーゲは「記号 (*Zeichen*)」や「名前 (*Name*)」として理解しているものが固有名 (*Eigenname*) の役割を果たす何らかの表記手段であるということと、それゆえに、その記号法の意味は特定の対象 (*Gegenstand*) であり、概念 (*Begriff*) や関係 (*Beziehung*) ではないということである。(…) そのような機能を果たす表記を一括して固有名と名づける」(SB.27) としている。ただし、ここでいう記号や名前が「固有名 *Eigenname*」であるとするフレーゲの理解を前提として進めてゆく。

彼は固有名により表示されたものを意味とし、表示されたものの与えられる様態は意義に含まれると考えた。そして「固有名 (語、記号、記号結合、表現) は、その意義を表現し (*ausdrücken*)、また、その意味を意味する (*bedeuten*)、または、その意味を表示する (*bezeichnen*)。我々は記号によって意義を表現し、記号によってその記号の意味を表示する」(SB.32) そして固有名のような役割を果たすものとは、一つの個別的な対象を表示する記号が、複数の語、あるいは他の記号から構成されているということもありうる (SB.27) と主張する。

フレーゲにおける固有名の意義は、その名が属する言語や表記法に十分に通暁している人々の、全てにおいて把握される。しかし彼が「本来的固有名」と呼ぶような「アリストテレス」に関しては、

当然その意義は各人各様に異なるものであるが、意義が異なってもその意味が同一のままであれば、「意義のゆれSchwankungen」は容認ができるとした。この点で、フレーゲの固有名を個人言語（個人方言idiolect）においてみてゆく傾向を読み取れるが、そのような変動は完全な文においては許されない。

またある固有名を含む文が主張される時、その文が一つの思想を表現していると言われるためには、その固有名は何らかの対象を表示していなければならず、何も表示しない場合には、その名前は「無意味bedeutungslos」である。「思想というものは、その思想の諸部分の一つが意味を欠いていると我々が知るときただちにその価値を失う」（SB.34）即ち名前の意味を問うことは、指示対象の存在または非存在を問うということである。

思想について彼は、次のような理由から文の意義と見なすべきだと考えた。それは、同じ意味をもつ文中において、一つの語に対し、それを意義の異なる語によって置き換えた場合には、その思想は異なるからである。例えば、ある文中「～は、太陽によって照らされる天体である」において、金星という同一の意味をもち、それぞれ意義の異なる語「明けの明星」と「宵の明星」とを相互に置換してみる。その場合「明けの明星は、太陽によって照らされる天体である」という文の思想は、「宵の明星は、太陽によって照らされる天体である」という文の思想とは異なる。なぜなら明けの明星が宵の明星であると知らない者にとっては、前者の思想を真として後者を偽と見なすことがあり得るからである。しかし、そのように異なる意義を表す語により表現された文は、思想には影響しても二つの文の意味は同一の意味であり、それは真偽という真理値であると考えられる。このような理由から、思想は文の意味ではないとフレーゲは考えた。

## 2. 間接的文脈

さて、外延論理において通常の文は、同一性関係を示すと思われるものに対して、代入則が成立する。それは同一者不可識別の原理といわれるもので、先におけるライブニッツの「真理保存的置換原理」である。

### (1) フレーゲ・パズル

信念文におけるパズルの原型とはどのようなものであろうか。外延論理においては、そもそも具体的な内容やフレーゲのいう思想Gedankeについて考慮せず、その真理値のみを扱うので、同一性における公理には以下の代入則が成立する。

(SI)  $a = b$ において、 $a$ がFならば、 $b$ もFである。 $(a = b \rightarrow [\varphi(a) \leftrightarrow \varphi(b)])$

命題的態度文脈において、その代入則が成立しないように思われるのが、フレーゲ・パズルといわれ

る。

(1) 人物 $\alpha$ はヘスペラスが宵の明星であると信じている。

しかし、 $\alpha$ はヘスペラスがフォスフォラスであることを知らない場合、以下のような信念文に関して、判断を保留にすることがありうる。

(2)  $\alpha$ はフォスフォラスは宵の明星であるとは信じていない。

またこのような信念判断の保留に関する表現は、次のような文に対して、それが真であるとさえ判断することがある。

(3)  $\alpha$ はフォスフォラスが宵の明星でないと信ずる。

上記の例は、以下のようにも考えられる。

(\*)  $a$ がFでないとき、 $b$ がFならば、 $a \neq b$ である。

では、(\*)の文の、それぞれの「( )はFである」に「 $\alpha$ は( ) $\neq a$ と信じる」を代入した場合、

(\*)'  $\alpha$ が、 $a \neq a$ と信じない場合、 $\alpha$ が $a \neq b$ と信じているならば、 $a \neq b$ である。

と考えることができる。自己自身と同一でないような $a \neq a$ は誰も信じないだろうから、「 $a \neq a$ と信じないこと」は真になりうると考えられる。

(\*")  $\alpha$ がチョモランマはチョモランマと同一ではないと信じない場合、 $\alpha$ がチョモランマはサガルマータであると信じないならば、チョモランマはサガルマータと同一ではない。

上記のような文は、事実に基づいてその名前の対象を明らかにしてみると、どちらも同じ山の中国名かネパール名かの違いであって、同一の意味をもつ。つまり、 $\alpha$ がいかにも同一ではないと信じていようとも、チョモランマはサガルマータであると事実いえるのだ<sup>4</sup>。これらが、命題的態度文脈においては代入則が成立しないといわれる所以である。

## (2) 間接的な意味と意義

フレーゲは通常の仕方で語を表現する場合、われわれが語ろうとしているのは、その語の意味 *Bedeutung* とした。そして〈記号・意義・意味〉の関係性について、正確に理解するためには、例外的なものにも常に注意すべきであるとし、直接話法と間接話法について以下の区別を行った。

彼はわれわれが「語そのもの」や「語の意義」に関して語りたと思えば、それは記号の記号をもつことになり、そのような場合は表記として引用符を用いて第三者の言葉を囲むことになっているとした。つまりそれは直接話法 *gerade Rede* において第三者の言葉を引用する際に起こることで、引用

される言葉は「その第三者の言葉を意味し」、「第三者の言葉の方が通常のgewöhnlich意味をもつ」(SB.28)と述べた。しかし引用符を伴って表現されるような、その引用記号「*°*」内にある語は、「通常の意味」をもつものであると理解されてはならない。(SB.28)

一方、引用符を落とした形で表現されるような、間接話法*ungerade Rede*においては、他人の語の意義に関して語ってるということであり、その語は通常の意味をもつのではなく、「通常の意味」をもつとした。即ちその語が間接的に用いられている間接話法においては、語は「間接的な*ungerade*意味」を持つ。従って、「通常の意味」と「間接的意味」の区別によって、その語の「間接的意味」を「通常の意味」とし、意義についても、「通常の意味」と「間接的意味」とを区別したのである。(SB.29)

彼は代入則において、置き換えられる表現が文、特に直接話法または間接話法である場合には例外が生じるという。また「文は、直接話法においては再び文を意味し、間接話法においては思想を意味する」(SB.36)とし、それらの例外は副文のうちに見ることができる。

「副文*Nebensatz*」は主文を含む複合文*Satzgefüge*の部分である。つまり*daß* (that) 節を伴って表現される型である。副文は文法的用法の視点から、文成分を「代理するもの(再現代理するもの)」として、名詞節・形容詞節・副詞節などに区分される。(SB.36) また副文の意味は、真理値ではなく、「ただ思想の部分」でしかない。彼は副文の意義において、それが独立した思想ではないものとし、間接話法をもって複合文の考察を行う。

先述したように間接話法において、*daß*節により導入されてくる名詞節の語は、間接的意味をもち、それは通常の意味と一致するものである。従ってフレーゲは副文は「意味としては一つの思想をもつものであり、真理値はもたない。意義としては、思想ではなく、「～という思想: *der Gedanke, daß...*」という複合文全体の思想の部分*Teil des Gedankens*にすぎない」(SB.27)とした。即ち複合文の間接的な意味が思想であり、間接的な意義がその思想の部分にすぎないということは、文の真理値には影響しないことが窺える。

複合文：直接話法－ [ $\alpha$ は「明けの明星は惑星である」と言う。

:  $\alpha$  says 'the morning star is a planet.']

これを間接話法に変換すると、引用符が落ちて*that*節を伴い表現される。

間接話法－ [ $\alpha$ は明けの明星は惑星であると言う。

:  $\alpha$  says [that the morning star is a planet.]]

直接話法において引用符の中の文の意味は、引用された $\alpha$ の述べた表現そのものである。一方、間接話法においては、 $\alpha$ が言ったことの趣旨を間接的に表現するだけであって、 $\alpha$ 自身が使用した言葉そのものではないから、その意味は、間接的意味、即ち通常の意味(=思想)をもつ。

フレーゲによれば、副文を伴う主文は意義として一つの思想を持ち、文全体の真理は、副文の真理・非真理も含まない。(SB.38) また副文においては、その意味は間接的意味即ち通常の意味であるから、同じ表現をもつ通常の意味で置換することは許されない。だが副文では、その間接的意味は通常の意味であるから、同じ意義をもつ表現のみ置換が許されると考えられる。そしてここから、文の意味が必ずしも常に真理値ではないという例外が生じる。例えば「明けの明星」は必ずしもすべての文脈で金星を意味するわけではない。なぜなら上記のような間接話法において「明けの明星」が間接的意味をもつ場合には、金星を意味しないからである。

さて、フレーゲは同一性言明における認識論的価値の差異の問題を意義の差異に還元した。

そして直接話法と間接話法とでは、その引用符が解除されてしまったら、当の表現は間接的意義に変換される。外延論理においては真理値のみを問うような、内容を問わないものであるので、異なる意義が結びつく場合でも、双方が真であると見なされれば問題なく代入則は成立する。しかし先の例「～と信じる」のような副文を伴う場合は以下のように考えられる。

(4)  $\alpha$  はヘスペラスが宵の明星であると信じる。

そして、 $\alpha$  は「ヘスペラス」と「フォスフォルス」が同一とは知らない場合、次のように主張するだろう。

(5)  $\alpha$  はフォスフォルスが宵の明星ではないと信じる。

ともにこの時点で、次元を異にしてしまう。(4)(5)ではもはや、引用符が解除された型を伴うので、文の意味は、間接的意味すなわち通常の意味をもつ。このように区別された場合、(4)(5)には異なる間接的意味=通常の意味が表現されており、かつそのように異なる意義をもつということは、その思想も異なる。間接話法で代入則が成立するためには、同一の通常の意味即ち間接的意味ならば置換できる。同一性言明の真偽の対象は、名前の指示対象であり、このような間接話法文においては文は通常の意味をもたないのである。つまりそもそもこれらの文が、代入則を侵すような対象にはならないであろう。換言すれば、副文を伴う主文は意義として一つの思想を持ち、文全体の真理は、副文の真理・非真理も含まない(SB.38) のであって、(4)(5)のような文が異なる意義をもつということが直ちに、 $\alpha$  が矛盾した信念をもつと帰結できないのである。

### 3. 指標詞「私」の独自性

フレーゲは、指標詞indexicals「私」について、実に興味深い独自の考察を展開している。彼における指標詞「私」とは、「固有名や指示詞とともに「直接指示性」と「指示の固定性」を示すという点で、記述と区別され、また固有名と異なり、発話の文脈への感応性を示す。(他方、指示詞とは異なり、指差しなどの直示行為を必要としない)しかし、いったん発話文脈が固定されれば、それによって「私」の指示対象は確定され、以降文脈に変動のないかぎり、指示対象は固定される」<sup>5</sup>という機能をもつと



考えられる。

フレーゲの考える「私」の独自性が最も顕著にあらわれているのは『思想—論理探求 [G]』においてであろう。彼は、固有名に対する他の人々の理解と「私」の発話者が自己自身に対して理解する仕方が異なっていると考えている。

グスタフ・ラウベン博士が「私」の使用のもと、(\*)のような発話をしたとする。以下(1)－(4)は、その際に想定することができる前提と[1]－[4]はその発話に対するフレーゲの見解である。

(\*)「私は負傷している。」

(1) その発言を聞いたレオ・ペーターが「グスタフ・ラウベン博士は負傷している」と報告する。

その際、レオの報告文は、博士自身が発話した内容と同一の思想を表現しているか。

(2) ルドルフ・リングェスはラウベン博士が(\*)のように発話した時居合わせていて、かつレオの報告を聞いていると想定する。ラウベン博士とレオにおいて、同一の思想が発話されているとするならば、その言語に通曉しているルドルフは、自分が居合わせた時にラウベン博士の発話内容を思い出し、レオの報告に際し、直ちに同じ事柄が話題になっていると知るに違いない。

(1)(2)の場合のフレーゲの解釈は、固有名が関係するとその人々が通曉している言語の熟知 *Kenntnis*に「独自の事情が絡む」(G.65)と考えた。それは「グスタフ・ラウベン博士は負傷している」という文に、ごく少数の人しか、ある確定された思想を結びつけていないということが往々にしてありうるという理由である。(G.65) フレーゲは、文の完全な理解に、固有名を含む「グスタフ・ラウベン博士」という語彙の熟知を要請する。

(3) レオとルドルフの両人が、両人にとって周知の住居に、「グスタフ・ラウベン博士」ということで、唯一人の医師として住んでいる当の医者である、と解しているとすれば、両人は「グスタフ・ラウベン博士は負傷している」という文を、同じ仕方で理解しているといえる。また両人は同一の思想を結びつけている。

(4) しかしその際、ルドルフは当のラウベン博士と個人的な面識がなく、(\*)と発話したのが、まさにそのラウベン博士だったことを知らないということがありうる。

(4)の場合は、ルドルフは、同じ事柄が問題になっているということは知り得ないのである。(1)－(4)までの理由から、フレーゲは次のようにいう。「レオ・ペーターが表明する思想は、ラウベン博士が発話した思想とは同じではない。」(G.65)

(5) 加えて、ヘルベルト・ガルナーが、グスタフ・ラウベン博士は1875年9月13日に某地で生まれたこと、またそのことは他の誰にも当てはまらないということを知っているが、彼が現在ラウベン博士の住所やそれ以外のことを何も知らないと仮定する。

(6) 他方、レオは、グスタフ・ラウベン博士が1875年9月13日に某地で生まれたことは知らない。

(G.65)

(5) (6) は固有名「グスタフ・ラウベン博士」を考慮に入れる限り、ヘルベルトとレオは、「この名前で実際は同じ人物を表示しているとしても、同一の言語を話してはいない」(G.65)と彼はいう。というのは彼らが同一人物を表示していると知らないためであり、(6)のためヘルベルトは「グスタフ・ラウベン博士は負傷している」という文に、レオが表現しようとしているのと同一の思想を結びつけてはいないのである。フレーゲはたとえそれらの不都合の回避のために、レオに固有名「ラウベン博士」を、ヘルベルトに固有名「グスタフ・ラウベン」の使用を仮定しても、両人は自分が使用する固有名を含む文の意義は、真と見なすかもしれないが、異なる固有名を含む文は偽と見なすことがあると指摘する。これは固有名に関して各々が結びつける、個々の意義が対応していると考えられ、それぞれ異なった思想をもつといえる。しかし同一文から生じる異なる思想は、真理値の次元では一致する。

以上(1) - (6)より、「固有名に関して、それを介して表示されるものが与えられるその唯一の仕方が結合されるということが、本来は要求されねばならない」(G.65)とフレーゲは述べている。

つまり固有名が意義を介して表示対象が与えられるという唯一の仕方が対象に結合されることが要求されているのである。ではラウベン博士が(\*)「私は負傷している。」と発話した場合、「私」と「唯一の仕方」はどのような結合関係のうちにあるのか。

「[1] さて各人は、彼がいかなる他人に対しても与えられえないような、ある独自で根源的な仕方で in einer besonderen und ursprünglichen Weise、自分自身に与えられる。

[2] ラウベン博士が、自分は負傷していると考えるなら、その場合彼は、恐らく彼が自分自身に与えられるその根源的仕方を基礎にしている zugrunde legen であろう。

[3] そして、そのように規定された思想 der so bestimmte Gedanke は、ラウベン博士自身だけが把握しうるのである。

[4] さてしかし、彼〔ラウベン博士〕は他人に〔その思想を〕伝達 Mitteilung したいと思った。ただ彼のみが把握しうるような思想を、彼は伝達する mitteilen ことができない。( [G], 66 ; Der Gedanke: eine logische Untersuchung )」

この場合に、ラウベン博士が何とかして意思の疎通をしたいと思うならば、彼はどのような表現を

用いればよいのだろうか。フレーゲの解答では、意義がその鍵を握る。つまり「私は負傷している」という場合の「私」を他の人々にもまた把握可能な意義において、例えば「この瞬間に君達に話しかけている者」というような意義で用いなければならないとする (G.66)。このことは、ラウベン博士は「私」の使用をする際、発話の状況を彼のみが把握しうる独自の思想表現に役立てていることになる。

意味から切り離されても、固有名から意義と思想を得ることができるというフレーゲの視点から、ラウベン博士のような例より見出せることは、固有名の意義が思想に貢献すること、そして固有名の意義を介して、何らかの思想が把握され対象を指示するという過程は、意義が思想の構成要素と見ることができる。また意義のそのような思想への貢献の方向性とは、ラウベン博士が彼にのみ把握しうる独自の思想へも、意義は貢献していると派生できることを示している。フレーゲが意義を介しての「唯一の表示の仕方」として、それを「私」の独自性へ結びつけたのも、「彼自身のみが把握しうる思想」を構成しているのが意義であるからだろう。彼は「私」という語を発話状況やその文脈に感応的な表現とし、またその発話状況は「私」が「この瞬間に君達に話しかけている者」という思想を表現することに役立つとした。そして意義が思想の構成要素ならば、話者に独自の意義は独自の思想を構成するといつてよい。フレーゲにおいての意義は公共性をもつ客観的なものであり、一方で「私」の発話者においての意義は、いかなる他人に対しても与えられることのない特権的な位置にある。

フレーゲの徹底した指示の仕方は、固有名の意義を介して対象指示をするという方向性であり、その逆は成り立たないという意義の方向付けである。「私」の独自性は唯一の仕方である意義を介してのみ、その人自身に独自の根源的な仕方によって表示される意味をもつ。その場合ラウベン博士は、独自の意義を介して独自の思想を「把握する *fassen*」限り、根源的な仕方によって、自身に独自の対象である「私」を限定しているといえる。

さてわれわれは、「私」という語を使用した時、その使用の脈絡 *context of use* に可感的であり、発話の状況 *circumstance of evaluation* に相対的に指示対象が決定されることをみてきた。フレーゲのいう人称代名詞的な「私」はその使用が発話主体に依存的で、かつその文だけでは情報として不十分であるから補完を要するものであった。以上の見解から、発話者当人は「私」の使用により、他の者との完全なる意義の重なり合いがなく、自分自身にしか把握できない他の誰のものでもない思想を獲得し、話者のみが把握しうるような自身に固有の思想を伝達することはできない独自性をもつ。

しかし「私」と固有名との関係性が、逆に自己自身に否定されるような場合や、またそのような信念をもつような場合は意義の射程はどこまで拡大可能であろうか。

### Ⅲ 現代精神分析理論からみる固有名

#### 1. ラカン理論における固有名の位相

われわれが「私」という語を表現する際の「私」というものは、一体どのような次元で考え、把握しうるのか。われわれが一定の言語規則に従って言葉を使用していること、また意義を共有することが可能であるのは、われわれ自身も言語の側から規定されている節がみられるのではないだろうか。実際にわれわれは、最初に生まれてから誰一人もれなく命名され社会的契約を結んでいるという経験をしている。自らに自己自身の意義を結びつけ独自の思想を形成するということも、われわれが一定の言語の規則に従わねばできないことである。

##### (1) ボロメオの結び目

フランスの精神科医ジャック・ラカンJ.Lacan (1901-1981)における固有名とは、われわれが一般に呼ぶそれとは異なるものである。

第23回セミナー『ル・サントムle sinthome』<sup>6</sup>において、彼は心的構造の視覚的表現として、三つの境域相互の関係性をエクリチュール（書字）により表した。

心的構造を取り扱う差異の構造仮説として想定された三境域は「現実界 le réel、想像界 l'imaginaire、象徴界 le symbolique」とされ、それぞれ「R (le réel) =生身の身体、物そのもの」「S (le symbolique) =言葉による世界の再構築」「I (imaginaire) =言葉を獲得するまでの間（イメージや視覚優位的な傾向性をもつ）」に対応する。この時期はラカン思想の中でも第3期 [1961-71]におけるもので、もう一つの構造的な要素である「補填 suppléance」の概念が導入される。

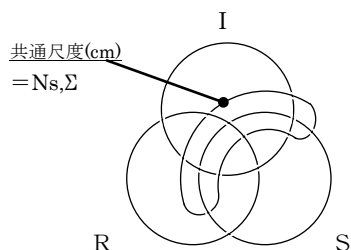
それ以前の時期では、〈主体—シニフィアン—対象 a〉という二次元表現で関係性が表されており〈S → S<sub>1</sub> → S<sub>2</sub> → a〉のようにも表せる。これらの記号は、それぞれ定義づけられた概念に基づき、矢印の方向性は人間が言語を獲得してから辿る変遷を仮説として表して「固有名を獲得してから辿る変遷の方向性」とも映し出せる。

第21回セミナー『騙されぬ人々は彷徨う Les Non-dupes errent』では、結び目の輪はそれぞれ「独立した輪」として扱われ、その際に導入されたのが「第四の輪quatrième cercle」である。心的境域は、これら四つの境域の相互関係によって説明されるようになった。ラカンはこの第四の輪が信じるにより成立するようなもの、つまり「宗教的現実réalité religieuse」<sup>7</sup>と同一のものであることを指摘した。その意味とは、「人間であるには、何かを信じている」というような意味合いにおいて使用されている。宗教的現実と呼ばれる第四の輪は、そのままではバラバラになってしまう三つの輪を繋ぎとめる「補填」の機能を持つ。

## (2) ラカンの第四の輪

さてラカンは第四の輪の機能を、〈父の名 Nom-du-Père〉、症候sinthome ( $\Sigma$ )とも表現した。

象徴的命名



そして三境域と第四の輪とが構成する関係に関して、第四の輪を「共通尺度commune mesure」と呼び直し、その基本機能は「名を与えることle donner-nom」＝「命名nomination」とする。

ラカンの見なす命名とは、特定の境域と対をなして残る二つの境域を結び合わせる機能である。異質の境域 (RSI) を一つの構造として論ずるには、各々が異なった境域を保ちながらも、一つに結ばれるべき共通部分をもつことが要請されねばならない。

さて、共通尺度の獲得により境域が結び合わされることは、第四の輪によりわれわれが「言葉を一話すー存在」<sup>8</sup>となることを示唆している。そうして異質な境域「言葉をSー話すIー存在R」は、一つの構造のように見出される。

## 2. 本来的固有名

### (1) 象徴的命名

共通尺度により結びつく境域が異なれば、その命名も異なる。彼はそのことに注目して、「現実的命名・象徴的命名・想像的命名」と命名を峻別した。ここでは固有名理解に貢献するであろう「象徴的命名Nomination symbolique」に焦点をあてる。

ラカンにおける象徴的命名とは、〈父の名〉(S<sub>1</sub>)の機能である。この時点で〈父の名〉の機能とは何かという問いが直ちに発せられる。社会的成員になるには命名がされることが必要だが、主体側は命名行為に対して受け身であり、それは換言して言語の側から介入される型をとる。これは母子未分離の状態から切断されることを意味する。

ここで〈母ー子〉との二者関係に〈母ー父ー子〉の三者関係が加えられる。つまり切断を意味する言語の介入とは、象徴的な〈父の名〉の介入として見なすことができる。

「命名Ns」は、象徴界が成立するための必要条件であり、鏡像段階的(母ー子関係)な「想像界と現実界の間に介入する象徴的な去勢castrationの機能」<sup>9</sup>でもある。そして何ものでもなかった主体は、名ー「固有名nom propre」を獲得する。しかし同時に精神分析的視点において、それは音声や文字表記により再現された瞬間に「普通名nom commun」に変換されているというパラドクスを抱えている。

普通名に変換された具体的な固有名は、言語の領野（象徴界）内部に対して与えられている名前とされる。

それに対し本来の固有名は、象徴界そのものに対して与えられるものであり、象徴の内部では発音も表記もされ得ない。それは、象徴界から除外された「非固有名」としてその命名作用を象徴界全体に及ぼしていると考えられる。厳密には象徴界に関与していながら、象徴界においてはそれと指し示すことのできないようなものである。

## （２）精神分析的固有名

精神分析医の藤田博史は次のような考察をしている。（ここでの固有名は、象徴界内部で変換された具体的な固有名という意味に解す。）

「固有名のみによって唯一単独の特定人物を指し示すことは不可能である。というのは、例えば複数個存在する固有名「ラカン」は血統を保証するものとして「家系」の中に連続的に書き込まれ、さらに「ジャック・マリー・エミール・ラカン」という形で限定しても、これが唯一単独であるということを示すには、この世に存在する固有名リストの実際の点検をしてみなければならない。「いや、わたしのいうフロイトは1956年にMoraviaで出生したあの精神分析の創始者のことです」というならば、固有名の機能を侵害している。われわれが人物に対し記述をする時、もしくは人物について語る時、その固有名とは歴史の一時点から振り返って捉えられたときに初めてそのようなかたちで「普通名の集合」としてのみ事後的に決定されている事を発見する。こうして固有名とは「歴史的に決定された普通名の集合」に固有名として与えられた普通名のことであり、さらにこの集合を象徴界全体と考えたときに、本来の固有名が「象徴界の内部に見出すことができない」という条件のもとに象徴界そのものを遡及的に名付けている「名なき名」のことに他ならないことを理解する。」<sup>10</sup>

この態度は精神分析理論における〈真理〉が、経験的真理という「歴史的真理historische Wahrheit (G.Freud)」をさす見地に起因している。それは事後性を象徴的命名として構造的虚構と捉える事で、構造を経験的に再構成してゆく態度である。

象徴界参入の契機となり、それを名指し存立せしめているのは〈父の名〉であり、まさにその場が本来的固有名である。即ち象徴界を名指している〈父の名〉(Si)は、常にS<sub>2</sub>以降の意味連鎖に隠喩的な作用を及ぼしているといえる。意味連鎖は象徴界における歴史が蓄積されてゆく過程であり、記号と記号の結合は恣意的であるので、われわれには各人各様の歴史が蓄積される。

そして象徴的領野においては、具体的な固有名もまたそれを変換する音や表記も等質なものである。即ち構造内部において具体的な固有名を記述によって置き換えることは可能であり、この点からわれわれは再び記述により、固有名を意味論的枠組みにおいて捉え直す可能性を見出す。

以上から個々の領域に隠喩的な作用を及ぼすのは、先に挙げた〈真理〉であるから、可逆的に〈真理〉も各人各様であると結論づけることができる。構造的位相から〈真理〉と〈症候Ⅱ〉同位置にあるので、おしなべて個体領域における〈症候〉もまた各人各様といえることができるだろう。

ラカンは象徴界における共通尺度の機能を〈大文字のファイΦ〉と呼ぶ。つまり共通尺度と〈Φ〉は厳密にはイコールの関係ではなく、その機能に他ならない。

### 3. 意義と固有名

#### (1) 固有名と否認

現代精神分析理論における固有名とは、誰の名前でもなく誰も指示しえないという非固有名であり、前段階的位置にある固有名の集合（目録リスト）と解することができる。それは以下の様な臨床例に因る。

「実際、わたしたちは日常の中で固有名について徹底的に追及することは回避しており、そこに漠然的解決を与えてことさら固有名と実在との結びつきを深く疑うことはしていない。ところが精神病では「来歴否認」という形で自らの固有名と自らの存在との突き合わせが図られるということがおこり得る。この「厳密であろう」とする精神病者の試みは、逆にわたしたちに「固有名は存在にとって非固有である」という逆説を教えている。」<sup>11</sup>

この事態は精神病患者において、自身とその人物の固有名との間に否認が起こることである。即ち固有名が、自分自身と同等のものであるという規定をもたなくなることである。固有名喪失の空白（＝精神病状態）は症状として現れてくると考えられ、それは空白の「補填」として現れてくる。

「フランス語で使用される補填suppléanceという語の対象はものではなく、人（の公的な役職）である。（...）「補填」の第一義的な意味とは「ある公的な役職にある人の一時的な欠席に対して同等の機能をもった人が法的な手続きで任命されてその機能を代行すること」<sup>12</sup>である。即ち欠如に対する補填として固有名が与えられているということは、然るべき手続きで任命されれば、本来の固有名の代行が十分に可能であることを示唆していることに他ならない。

精神分析においては、「否定」と「否認」はその用法が分けられている。「否定（dé）négation, Verneinung」はいったんは肯定の手続きを経ねばならず、その肯定に対しての否定であり、完全な抑圧が働いているといつてよい。「否認déli, Verleugnung」は肯定の手続きを経ず、最初からそれを否認するというのである。ところで、このような否認が起こるメカニズムとしては、そもそも〈Φ〉が機能せず壊れているか、もしくは空席のためにとりあえずの項がはまっていると見なされることもある。以下は〈Φ〉が獲得されるメカニズムをさらに端的に表している。

「語る存在」は、自己言及の機能を可能にしている第三項を、構造を保証する初期項として事後的に設定することができる。精神分析では、すでに虚構として構造化されている構造の地平から論理的に要請される「最初の虚構」としての初期項を「真理」と呼んでいる。この「真理」は、わたしたちが語ることによって同一化の運動を継続する限り、論理的に要請され続けるひとつの虚構である。

(...) 構造が成立するための論理的な基本条件は、まず初期項に対する「肯定Bejahung」が生じていることである。然るのち「肯定された初期項」の「否定Verneinung」が可能になる。これにより初期項は「真理」位相を獲得し、その構造は自己言及性を手に入れる。この「肯定→否定」という手順は、シニフィアンによる構造化を支える根本機制である。<sup>13</sup>つまり〈真理〉が正常に機能するためには、否定の機能も非常に重要な役割を帯びてくるといえる。来歴否認という名の由来から、そもそもそのような主体は〈真理〉を完璧に肯定し損ねてしまい、否定の機能がうまく働いていないとも解される。つまり固有名に関する否認の事態とは、「私は～でない」という文に対しての「[私は～でない]ということはない」という否定がおこなわれぬ事態ではないのか。そもそも否定の機能が働くということは、最初の肯定が基盤となった上であるから、単に発話される「私は～でない」という文は否認の機能しかもたないのである。

ではわれわれは言語的な解釈としての糸口は見つけられないだろうか。否認の状態でも「私は～でない」という〈Φ〉が空席であるような仮の言明と、それを語る身体を基盤とする話者が残ることだけは確かである。また記号が残されているために一応の言明は可能であるとみなせる。来歴否認は自己自身と具体的な固有名との突き合わせの問題であった。この視点からわれわれは発話をしている「私」自身の把握と固有名との「把握の仕方」における差異を見て取れる。つまり双方の間にフレーグ的な「把握の仕方・規定の仕方」つまり意義Sinnの異なった結びつけ方がされているために、異なった思想を互いに表現していると思われる。

異質の境域が結びつくには「宗教的現実réalité religieuse」と同一の共通尺度が必要であり、一つの信念が付与されねば成立しない。そして何よりその三境域にまたがっているのは他でもない「私」という共通尺度である。「私」は自己否認文により、自己を逆規定しようと試みているのである。つまり「私」の位相は共通尺度の場へと還元することができる。まさにこのことは、普段「私」といつている独自性とは、固有名にあるのではないという視点を与えるものである。ラカンこれを、デカルトの[cogito ergo sum ; Je pense donc je suis]と準えて、[我思う処に我あらず 我思わぬ処に我あり : Je pense où je ne suis pas. Je ne pense pas où je suis.]と表現した。

これらの否認文には常に「私は～ではない [と信じている]」という「副文 (that節) を含む信念文の形態」が賦与されうる。われわれは「私」をあまりにも自明のものとして使用しているので、「私」と発話した際、どのような把握がそこに含まれているのか見過ごしてしまう。



ラカン理論の境域の位相や自己否認等の考察から、「私」を信念文という次元にまで還元する際に貢献するのはフレーゲ的意義Sinnといえる。彼は文法的に確かな解釈に基づいて、信念文を間接的文脈として扱った。

さて自己否認における自身と固有名の差異を、意義の差異と認めるならば、「私」に独自で根源的な仕方というのは、唯一に「私」に結びつく意義である。各々がそのような根源的な仕方を「私」に結びつけているならば、独自の把握が自身に対して可能である。

ラカン理論の固有名は次のように解釈できる。存在に対して本来的な固有性は、象徴化された時点で言葉により再現代理された名前にすぎず、①名前は命名行為によりそのものの名前になって初めて、固有名になるという意味の位置には〈精神分析的普通名〉が、また②象徴界内部には変換できないような、象徴界全体を保証している（名指している）「名なき名」の位置には〈精神分析的な本来的固有名Φ〉が据えられる。即ち第三項〈Φ〉＝〈父の名、S<sub>1</sub>、真理〉に相当する。そして次に③ラカン理論の位相における三境域を結びつける第四の輪、即ち共通尺度（cm）をフレーゲ的な「私」の独自の把握の仕方と位置づける。この共通尺度があつてこそ、「私」と固有名とを再構成できるのである。

ラカン理論において境域の位相が与えられ、自己否認について一つの解釈を得ることが可能となったのは、第四の輪の根本機能である「補填suppléance」という概念においてこそであるといえるだろう。

#### IV 固有名と意義論

本章では先における来歴否認のような例を、自己否認文というものに変えて、信念文とフレーゲの意義論的立場から見てゆく。

##### 1. 信念文と固有名

信念文とは、ある文や信念に対して話者が主張する際に、「～と信じるI believe that...」や「～と思うI think that...」というような副文を伴った表現によって表される。

信念文や命題態度的文脈についての問題は、フレーゲの間接的文脈の考察において、意義Sinn（間接的意味）が同一であれば代入則は、副文の真理には関わることなく成立する。パズルに付随する問題は、意義の差異の問題として再び把握し直され、再構成されねばならないであろう。また、信念文においてこのようにパズルが生じるのは、使用する文の内容を真と見なしている発話者側の個人方言の問題も多分に含まれているのではないだろうか。即ち「～と私は思う（ich meine, daß...）」という、副文that（daß）節は通常の意義をその意味とし、思想の部分でしかない。

フレーゲにおいては、意義が同一であれば置換は可能であるとしてその思想は変わらず、その置換

が成立しないのは意義が異なっている場合だとした。意義とは、「自身の仕方」に対応するような独自の意義であり、他者との言語での伝達の中において同一のことを把握していると互いに見なされるならば公共性を持ち、また他人の持つ意義が自身に全く把握される機会がなくても、対象に対して誰かが意義を結びつけている事実は依然としてあるという意味において、われわれから独立である。

## 2. 自己否認文と意義

### (1) 「私」の独自性と共通尺度

信念文や自己否認文において、共通にいえることとは、その言表が常に「私」の側から発せられているということである。即ち「その人にとっての」信念や把握といえるであろう。しかし例えば、直接話法におけるK氏の信念はK氏にとっての信念文として解せるが、間接話法においてはもはやK氏の表現した信念の内容は、K氏自身のそれとはいえない。前者はK氏の把握の問題に、後者はK氏の表現が間接的に用いられる時の副文の内容の問題に扱うことができる。

先の自己否認文をどのような表記によって解し、またいかなる意義の差異によって解釈できるのか。

自己否認の状態「私は～でない」という否認の主張の背景には、共通尺度の導入によって見てとれた「信じることにより成立する」というラカンの宗教的現実、即ち「～と信じるI believe that...」という信念態度が背後に賦与されている。それは「～と信じるI believe that...」や「～と思うI think that...」というような弱いものよりも、むしろより主張文に近いと思われる「～と主張するI assert that...」と考える方が適切と思われる。その理由としては、その否認の発話主体にとっては、自己否認文の内容「私は～でない」により表現される思想は、まさに真であるからである。そしてその一種の主張文が、話者にとっての信念に帰属されると思われることから、命題態度的文脈における副文「～と主張するI assert that...」として与えられると考えられる。

フレーゲの固有名論や現代精神分析理論における固有名解釈においては、前者は固有名には各人各様の意義が結びつき、また意義は公共性を持ち記述として表せること、後者は具体的な固有名は象徴の領野において音声・表記に変換されたものであるという見解から、その解決の端緒として、来歴否認での発話主体と固有名や自己否認文に関して、フレーゲの意義論的な見地をとる。

フレーゲの人称代名詞「私」とは、①いかなる他人に対しても与えられえないような、ある独自で根源的な仕方で*in einer besonderen und ursprünglichen Weise*、自分自身に与えられる。②私が、自分は～であると考えたら、その場合私は、恐らく私自身に与えられるその根源的仕方を基礎にしている*zugrunde legen*③そのように規定された思想*der so bestimmte Gedanke*は、私自身だけが把握しうる、という唯一の仕方=意義に支持されている。これを踏まえて「私は $\alpha$ ではない」という自己否認は、次のように表せる。(σは意義、αは固有名、x [σ\*]はxの意義を表す)

(1) 「私は $\alpha$ ではない」 $[I \neq \alpha]: I [\sigma^a] \neq \alpha [\sigma^*]$

即ち「私 I は、 $\alpha$  と同一ではない：私 I が自分自身 a に根源的な仕方で結びつけている意義  $I [\sigma^a]$  と固有名  $\alpha$  に通常結びつけられている意義  $\alpha [\sigma^*]$  は同一ではない」と解せる。

または  $I [\sigma^a] \neq \alpha [\sigma^*]$  は、私 [a] が ' $\alpha$ ' に対して与えている意義は、他者が私の固有名 ' $\alpha$ ' に対して与えている意義とは異なるとも解せよう。つまり、「私 [a] はみんなが [ $\alpha$ ] と言っているような私 (自分) ではない」ということになる。

再び自己否認文「私は $\alpha$ ではない」を副文を伴う信念文または「～と主張する I assert that...」という限り真である文に再構成すると以下ようになる。

(2) 「私は $\alpha$ ではないと信じている (主張する)」

= I believe (assert) that I am not  $\alpha$

副文以下の表現 ' $that I am not \alpha$ ' は、フレーゲに従えば、間接的意味即ち通常の意味と解せるから、自己否認文における固有名の否定は意義の相違に還元し得る。発話者はその場合、副文以下の思想を表現していると解釈できる。

さて、固有名 ' $\alpha$ ' と発話者「私」の独自に自分自身にしか与えられえない把握の仕方を、意義の差異の次元に還元するならば、われわれは以下の表記により、自身にしか把握されない独自性をもつ「私」と一意的存在を指示するとされる固有名との相互の乖離を、意義の問題として提出することができるであろう。指標詞「私」の発話主体である、指示対象の措定 fix とともに、副文中においては「私」に対応する意義と発話者の固有名に対応する意義との差異を求めることが可能である。(x [ $\sigma^*$ ] は x の意義を表す)

(3) I believe (assert) that I am not  $\alpha = I believe (assert) that I [\sigma^a] \neq \alpha [\sigma^*]$

上の表記はいわゆる、話者 a が「私 I」と表現したとき、話者 ( $\alpha$  自身が) が自分自身に根源的に独自に結びつけている意義  $I [a]$  と、誰かが固有名  $\alpha$  に結びつけている意義には差異があると解釈できる。つまり、固有名の否認は意義の問題として扱うことにより、その差異を意義の差異として再び再構成する。例えば「私=太郎」であるとすると、つまり私はみんなが [太郎] と呼ぶような者ではない、ということになる。この手続きによって、自己否認文の言語的な解決は意義論によりもたらされる可能性を表わしうる。自己否認文はこのように意義の差異の問題として扱うことにより、問題の再構成をはかり、われわれにその差異の理解を与える。そしてフレーゲの意義論の作用域を広げる後押しとなるのは、どちらにも共通している身体基盤である意味 *Bedeutung* と、必ず意義を介して発話主体に根源的な仕方で思想の把握がなされるフレーゲ的「私」の独自性であり、独立性をもつ三境

域を繋ぎ留める共通項としての、ラカンの「共通尺度」(独自性)ということができる。

### 3. 意味論的装置としての意義

自己否認文や信念文におけるパズルは、解決の可能性を意義論として、それに関わってくる「私」の把握の中に見るものである。このように固有名に付随する問題を意義の次元の差異として理解するならば、多重人格・二重人格の代表ともいえる[ジキルとハイド]の問題も、常にその発話主体が「私」と言う限りにおいて、私-[ジキル] (私-[ハイド]) は二つの固有名が一つの対象のうちに混在しているとしても、その差異は話者が自身に結びつけている意義の差異として考えることができるのである。このような諸問題を意義機能として還元することは、さまざまな回避の可能性や解釈をわれわれに与えるものである。固有名混在の場合には、同時にはジキルとハイドは発話し得ないという点に、上記のような意義論で解明しうる糸口がある。つまり人格交代や多重人格の論理学は意義論的領野において、再構成されるべきであろう。同一対象の混在名ジキルとハイドは以下のように表記される。

(Jはジキル、Hはハイド)

(\*) 「私はジキルだ」 I [σ<sup>a</sup>] = J [σ<sup>J</sup>] : 「私はハイドだ」 : I [σ<sup>a</sup>] = H [σ<sup>H</sup>] しかし「ジキルはハイドではない」(私 [ジキルである] は私 [ハイドである] ではない) : I [σ<sup>J</sup>] ≠ I [σ<sup>H</sup>]

ジキルとハイドは、「私」という発話において、自身の名前に関する意義と固有名ジキルの意義は同義である。また逆転した時も、自身の名前に関する意義と固有名ハイドの意義は同義である。しかし、自身の両方の名前に関する意義は相互に異なり、また一方の人格が登場した際は、他方の否認をするので、双方の意義は同一ではない。即ち二重人格の表記は以下ようになる。

(\*)' I am Hyde, but not Jeykil. = I[σ<sup>a</sup>] = H[σ<sup>H</sup>] ≠ J[σ<sup>J</sup>]

I am Jeykil, but not Hyde. = I[σ<sup>a</sup>] = J[σ<sup>J</sup>] ≠ H[σ<sup>H</sup>]

われわれは問題の解釈にあたり、身体基盤である意味Bedeutungと必ず意義を介して発話主体に根源的な仕方では思想の把握がなされるフレーゲ的「私」の独自性、また共通項としてのラカンの「共通尺度」に留意したい。

「私」とは状況依存的なトークンとして、特定の発話の状況において話者を確定する。フレーゲ的「私」とは、話者を根源的に規定する仕方をもつのであり、またそれは異質な三境域を結びつける共通尺度の位置づけに相当するとも考えうるのである。

意義機能とは、外界や表象などのさまざまな対象と結びつくことにより、構造化をなしているといえる。つまり意義とは、固有名や対象などへの接近の仕方や規定の仕方という機能を有するのみなら

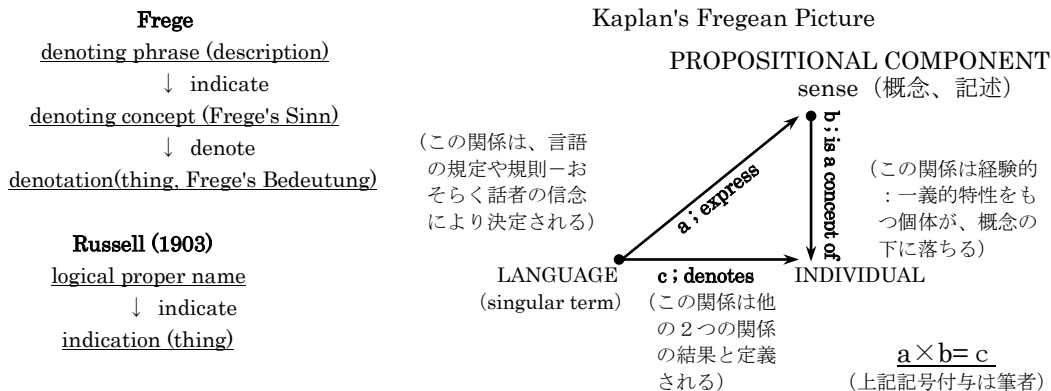
ず、またそれは言語と密接に関係していることから、文脈においてより詳細な構造化と分析を可能にする構成要素である。われわれはフレーゲの意義論を、意味論的な装置として提出し再構成することによって、その理論の構造化を見たのであった。そしてこれまでの考察はその意味論的装置である意義機能の構造化を裏付けるものといえよう。自己否認文は厳密であろうとする精神病者が、異なる状況における「私」の発話に結びつける意義の差異とも解釈でき、認識の拡張（ $a = b$ を同定する）を話者当人に要するものである。

## －終わりに－

伝統的な記述理論は、その反応としてさまざまな議論を巻き起こしてきた。それは徹底的に緻密さを独自の論理に追求したフレーゲをして、といえるであろう。われわれがフレーゲにおける意義の機能において見出してきたのは、信念文などにおける危機的状況においても、いわば隙間のないその構造化された意義装置の機能であった。しかし、意義機能の構造をさらに明確なものにするためには、残された問題はまだまだある。意義Sinnが意義論的装置として、十分に機能するためには意義のより詳細な階層分けと考察を要するものである。フレーゲの構造仮説を再構成する要素とも思われる意義は、固有名の指示においても、差異の把握や認識的価値においても、必ずそれを介してなされるというような、構造的「第三項」といえるだろう。その分析は、われわれに突きつけられた固有名の対象指示を遡及する困難に、一種の打開策を与える可能性をもっている。また意義分析がわれわれに示すものとは、現代精神分析理論により具体的な固有名が象徴界内部で音声表記に変換された普通名であるということが暴露されたとしても、その問題解釈の行方を記述によるアプローチへと引き継ぐものである。むしろ意義は、言語や名前がそのように象徴界内部における普通名の集合であると考えられような困難な問題解釈においてこそ、その身軽さを発揮するといつてよい。

引用文・註

1 フレーゲの固有名とラッセルの論理的固有名の対象指示の相違は、以下のような表記に表せる。またフレーゲ的な記述理論の対象指示の手順は、カプランの論文"Demonstratives"における図式化に見ることができる。(図式はKaplan [1989] p.485図より引用)



- 2 野本 [1991], p.56
- 3 判断を表す主張文から、主張する力Kraftを除去した残余。フレーゲの表記法においては、「判断線 ‘—’」で表される。力を欠いた場合、その文は思想を含むにすぎない。またそれは話し手や聞き手の言語使用の次元に属す。
- 4 この例の原型は、野本 [1989], p.116より名前や表現を変えて引用したもの。
- 5 野本 [1997], p.347
- 6 藤田 [1994], p.184. (Lacan [1972-73] 左記 小論 所収) 藤田においてエクリチュール固有の性質は音声言語とは異なって、言語を共有していない者同士の間でも、それが表現する構造が互いに了解されうるといものである。つまり発話された言語の書き写し以上のなにかを含んでいると考えられ、その性質とは表記にではなく、エクリチュールそのものがもつ固有の性質すなわち本質であると解される。
- 7 藤田 [1994], p.185
- 8 前掲書, p.187
- 9 前掲書, p.188
- 10 前掲書, p.188-189
- 11 藤田 [1994], p.189
- 12 前掲書, p.192-193
- 13 藤田 [1993c], p.212

参考文献 [略称] 表

Frege, G. [GLA] 'Die Grundlagen der Arithmetik', 1884. (野本和幸・土屋俊編『フレーゲ著作集2 算術の基礎』勁草書房、2001)

[FB] 'Funktion und Begriff', 1891. (黒田亘・野本和幸編『フレーゲ著作集4 哲学論集』勁草書房、1999)

[BG] 'Über Begriff und Gegenstand', 1892. (前掲書 所収)

[SB] 'Über Sinn und Bedeutung', 1892. (前掲書 所収)

[L[II]] 'Logik', 1897. in 'Nachgelassene Schriften', pp.137-163, 1969. (前掲書 所収)

[WF] 'Was ist eine Funktion?', 1969. (前掲書 所収)

[G] 'Gedanke: eine logische Untersuchung', 1918-19. (前掲書 所収)

[GGA] 'Grundgesetze der Arithmetik', 1893. (野本和幸編『フレーゲ著作集3 算術の基本法則』勁草書房、2000.

Lacan, J. [1974] 'Télévision', éd. Seuil, Paris.

[1973-74] 'Les Non-dupes errent', éd. version anonyme.

[1974-75] 'RSI', éd. version anonyme.

- [1975] 'Le Séminaire Livre : Encore', éd. Seuil, Paris.
- [1975-76] 'Le Séminaire Livre XXIII : Le sinthome', éd. version anonyme.
- Miller, J-A. [1988] 'Microscopie, in Ornicar?', revue du Champ freudien, No.47, éd. Navarin, Paris. pp.46-64.
- ジャック・ラカン[1992]藤田博史+片山文保訳『テレビジョン』（「テレビジョン」「顕微鏡視」所収）青土社.
- 野本和幸[1974]「G. フレーゲの存在論」『理想』 596, 1974.
- [1982]「直示性、指標性、社会性」『理想』 590, 1982.
- [1986a]『フレーゲの言語哲学』勁草書房.
- [1986b]「言語理解とは何か」『科学哲学』 19.
- [1988a]『現代の論理的意味論—フレーゲからクリプキまで』岩波書店.
- [1988b]「『私』の同一性」への意味論的アプローチ『科学哲学』 21, 1-14.
- [1988c]「フレーゲ・ルネッサンス—フレーゲ意味論の射程」『理想』 639.
- [1989]「信念文のパズル」『現代思想』 6月号.
- [1991]「名指しと信念」『ゲームと計算』岩波講座. (『現代哲学の冒険9』)
- [1997]『意味と世界』法政大学出版局.
- [1999]『フレーゲ著作集 4 哲学論集』勁草書房, 黒田亘・野本和幸編.
- [2001a]『フレーゲ著作集 2 算術の基礎』勁草書房, 野本和幸・土屋俊編.
- [2001b]「フレーゲ、初期フッサールそしてその後—算術および論理学の哲学（論理の意味論）を巡って」  
『現象学年報』 17, 35-47. 日本現象学会編.
- 藤田博史[1993a]『性倒錯の構造』青土社.
- [1993b]『幻覚の構造』青土社.
- [1993c]『人間という症候』青土社.
- [1994]「RSIと補填」『imago』（ラカ特集—藤田博史責任編集）青土社.
- [1995]『精神病の構造—シニフィアンの精神病理学』青土社.